

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第848号 平成26年12月9日

道徳の教え方？（1）

11月6日付の朝日新聞投書欄に「道徳教える人は良く考えて」と題する女子高生の一文が掲載されています。

その投書は小学3年生の道徳の授業の経験を基に書かれたもので、その概要は以下の通りですが、道徳教育をどう進めるかについて一つの問題提起がなされていると感じます。

売れないマジシャンが大きな仕事を断り、先に約束をしていた子どもにマジックを見せに行く、という物語が題材だった。

先生に「あなたなら仕事と子どものどちらをとりますか」と聞かれ、私は「子どもをとります」と答えた。すると先生は怒ったような声で「本当にそうしますか」という。次の生徒は仕事をとると答えると「正直でよろしい」と先生は嬉しそうにいった。

道徳の授業で正解は無いといわれていたのに、私の考えは間違っているといわれたようでショックを受けた。それ以来、私は道徳の授業では、自分の考えより、先生が求めていると思われる答えをいうようになった。

普通の授業も大事だが道徳という、心を考える授業も大事だが、子どものうちに教えられる事は影響が大きい。道徳を教える側はその事をもっと自覚し、子どもの目線になって考えて欲しい。そして、価値観の押しつけにならないよう、気を付けて欲しい。

投書の中に登場する指導教材が如何なるものか現物を見ていませんし、女子高校生の記憶もどこまで正しいのか分かりませんので論評のしようもないのですが、この投書を読まれた方の中には道徳教育に対してネガティブな印象を持たれた方もいるのではないかと思いますので、今回はこの投書を材料に道徳教育について考えてみたいと思います。

まず申し上げて来たい事は、投書した女子高生は道徳の授業の重要性を否定している訳ではないだろうという事です。むしろ、道徳教育をする側の先生の姿勢について、厳しい指摘をしていると理解すべきではないでしょうか。

その上で、投書の中に出て来る「売れないマジシャンの物語」が小学3年生の道徳の教材として相応しいといえるのか考えてみたいと思います。

学習指導要領においては、小学校の第3学年においては、

- ・自立心や自律性、生命を尊重する心
- ・集団や社会のきまりを守り、身近な人々と協力し助け合う態度

について指導する事とされていますので、授業の中で使用される教材は、その事に充分配慮されたものでなければなりません。

「約束は守れ」という単純な話をするなら事は簡単ですが、現実には「約束を守りたくてもそれが出来ない」というような難しい判断を迫られる場合が少なくありません。

道徳教育が、子ども達の発達段階を考慮しながら行われるべきものであるとすれば、投書の中で登場する「売れないマジシャンの物語」は、小学校3年生の子ども達に対する指導資料としては問題があるといわざるを得ません。

それは、投書の中での教師の指導ぶりをみれば明らかではないでしょうか。

子どもとの約束を第1に考えれば、何をさておいてもその約束は果たすべきです。しかし、そうしたくても出来ない特別の事情があったかも知れません。あの短い物語の中でも、そうした様々慮りながら考えていかなければならないはずです。

「子どもとの約束をとる」という答えが建前で、「仕事をとる」という答えが「正直でよろしい」というのでは、余りにも短絡的ではないでしょうか。

(塾頭 吉田洋一)